

2) IPW演習（リハビリテーションと生活空間デザイン）

日 程：2024年12月7日（土）12:30～17:00

会 場：日本工業大学（対面）

【授業（演習）の目的・概要】

日本工業大学建築学科生活環境デザインコースと埼玉県立大学理学療法学科を中心とする保健医療福祉分野の学科が連携し、**IPW 演習（リハビリテーションと生活空間デザイン）**を実施している。

この授業では、**保健医療福祉分野（主に理学療法）と建築分野の学生による混合チーム（1チーム3～4名）**で、**協力者（実際に障害をお持ちの方：頸髄損傷）が望む生活の実現、生きがいの創出、また、地域との関係を持ち役割を發揮できる生活環境の整備提案をまとめるグループワーク**を通して、IPWにおける**チーム形成プロセス**、および**チームによる課題発見・解決策等の討議の体験**、そして、この体験を振り返り（**リフレクション**）、意味づけ、**自分の課題を見出す**ことを目的としている。



全体オリエンテーション



協力者からの望む生活のお話し



チーム活動（作図）



チーム活動（討議）



チーム活動（採寸）

【演習のタイムスケジュールと内容】

	日本工業大学 建築学部	埼玉県立大学 保健医療福祉学部	
学科	建築学科生活環境デザインコース	理学療法学科	他学科（参加募集による有志）
学生	「福祉空間の設計」履修者 （2年生23名） ※2023年度:26名	「地域理学療法実習」履修者 （3年生12名） ※日工大履修者の1/2で配置	1名（看護学科） ※2023年度：3名 （看護・作業・健康開発学科）
内容	12:30～13:15	1) オリエンテーション（チーム毎に着席） 2) 「事前自己評価」の実施 3) ディスカッション方法の補足説明 4) アイスブレイク：自己紹介等 5) 対象となる当事者の自己紹介	
	13:25～15:25	グループディスカッション開始（120分間） ※各グループで適宜休憩を挟む	
	15:35～17:30	報告会（95分間） 1チーム5分発表 全体ディスカッション / 総評	
	17:30～17:40	「事後自己評価」の実施、終了	



【学生の学び】

この演習を通して、医療分野の学生からは、「疾患だけでなく、その人や環境に対する視点の重要性に気づいた」、建築分野の学生からは「これまで狭い知識で建築を考えており、住み手の身体機能や将来に対する視点がなかった」などの感想が聞かれ、各分野の学生が、専門性の違いを認識し、**多職種連携の必要**や自らの専門の重要性に対する**気づき**を得ていることが分かった。



全体発表会

【学生の学び（レポートから抜粋）】

日本工業大学	<ul style="list-style-type: none"> ・「対象者の生活を豊かにする事」を第一に考えている点は同じであったが、保健医療福祉分野を専門とする学生さんは、Fさんと共に生活する「人」について重きを置き、建築を専門とする学生は「建築物」に重きを置いていた。同じ目標や共通する考え・思いがある事は協力する為の基盤になり、新たな学びや価値観を得られることに気付いた。 ・異なる分野を専門とする学生とディスカッションをして、一つの考え方にとらわれていたことがよく分かった。異なる視点からの意見や知識が融合することが、より良い案を生み出す上で重要だと実感した。 ・設計者目線で福祉について学習していると、寸法ばかりに気を取られてそんなことよりも大事なその人の生活、気持ちなどにあまり目を向けられていないことに気づいた。この視点を得られたことがとても学びになったと感じる。建築分野を学ぶ私が提供する快適な暮らしは、快適な「住まい」であると同時に快適な「生活」であると考えるきっかけになった演習だった。 ・お互いの専門知識を共有することで、一人では思いつかないような課題解決策が生まれることが多くあった。多様な視点を取り入れることでより質の高い解決策が生まれることを実感した。特に、保健医療福祉分野の視点を取り入れることで、建築設計の中に新たな価値を発見することが出来る。 ・専門用語や考え方の違いから、相手の意図を正確に理解することが難しい場面がたくさんあったが、相手の知識や考え方を否定するのではなく、尊重しながら共通の課題に向けて協力する姿勢の大切さを感じた。
埼玉県立大学	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションの難しさを感じた。今まで、大学内の医療分野の学生としか討議しなかったが、今回初めて建築分野の学生と話をし、普段私がどれだけ専門用語に頼っていたのかを感じた。 ・私は、車椅子で生活するという情報から、段差をなくしたり玄関を広くしてスロープを付けたりすれば良いと大まかに考え、家の図面を見てどこに改修が必要かを考えようとした。しかし、日工大の学生は、まず始めに車椅子の寸法を測りに行こうとした。確かに実際に大きさを知らないと玄関を広くしたりスロープを付けると言っても、どのぐらいの広さや幅が必要か分からないと気づくことが出来た。 ・日工大の学生の出す意見は、やはり建築分野に焦点を当てたものがほとんどで、専門性が遺憾なく発揮されていた。我々は利用者の身体機能ばかりに焦点を当ててしまう傾向があり改善しなくてはならない点であるが、他領域でも同様の現象が生じていると気づいた。 ・理学療法的視点から提案する住宅改修案の中で実現できることは限られており、思った以上に費用がかかってしまうことに驚いた。しかし、自分には無い発想で代替案を提案してくれたこともあり、お互いに補填し合うような関係性を築くことができたと感じた。

【事前・事後自己評価の変化】

本年度は、**埼玉県立大学**では、**①利用者中心性、②メンバーの相互理解、④チーム形成のための能力**で事前よりも事後の自己評価に**有意な向上変化**が認められた ($p<.05$)。一方、**日本工業大学**では、有意な向上変化が認められたのは、**④チーム形成のための能力のみ**であった ($p<.05$)。昨年度は、本年度の県立大学と同様の結果であった。今回の**日本工業大学**は、**①～④全体的に事前自己評価が高い傾向**にあった。これについては、今後、検討が必要と思われる。

③メンバーの尊重については、両大学ともに事前・事後自己評価に有意差は認められなかった。**事前の平均値が4点満点中3.6以上と高い値**（県立大：3.62，日工大：3.74）を示していたため、事後に有意な変化としては表出されなかったと思われる。昨年度も同様の結果であった。

